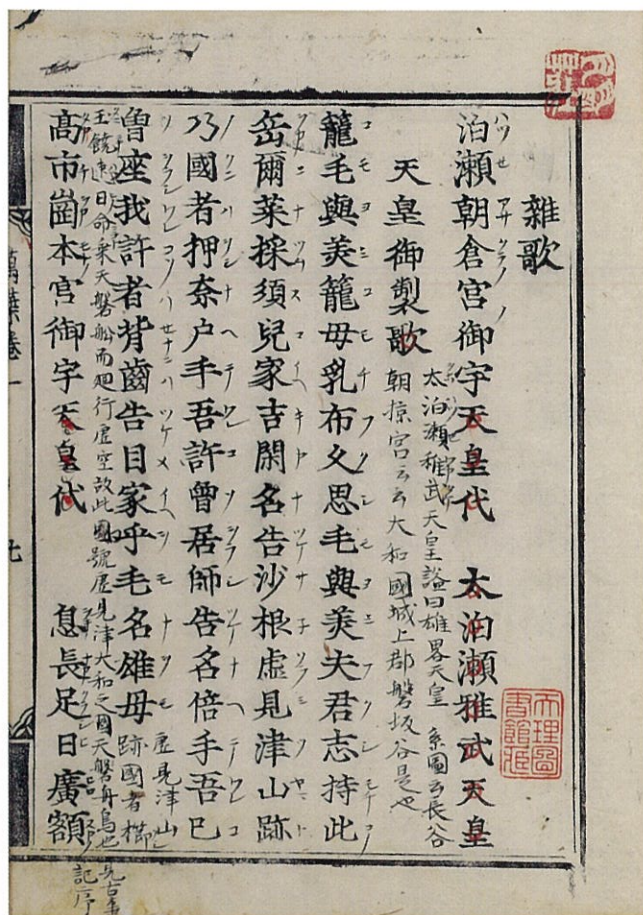


やまとの名品 天理図書館



まん しょう しゅう こかつじほん むくほん
万葉集 古活字版 無訓本

慶長期刊 20巻10冊
 縦27.6cm 横20.9cm

今年の五月一日から新しい元

号「令和」元年が始まったが、

その典拠となったのが、奈良時

代の後期に編纂された日本最古

の歌集『万葉集』である。

仁徳天皇の時代から淳仁天皇

の天平宝字三年まで凡そ四百年

間に詠まれた歌、約四千五百首

が収められ、作者は天皇・貴族

から無名の一般庶民に至るあらゆる

階層の人々に及ぶ。

書名の由来は、「葉」の字を

「世」(時代) 或いは(言葉)と

解して、万世に伝えられるべき、

万の言の葉を集めたなどとされ

ている。

歌は、行事や旅、自然や季節

を愛でる「雑歌」、主に男女の恋

を詠み合う

「相聞歌」、

亡くなった人

を悼む「挽歌」

から成り、人生のあらゆる場面

を素朴で人間性豊かに表現して

いる。

掲出本は、江戸慶長期(一五

九六〜一六一五)に当時既に西

洋と朝鮮より伝来していた活字

印刷技術によって出版された、

万葉集の印刷物で最も古いもの

である。それまでの木版印刷は、

伝統的に寺院で行われ、仏典の

外は僅かであったが、活字印刷

の導入で、為政者から民間まで

新規の事業が喚起され、古典文

学を始め、漢籍・医書、更には

薰珮後之香

于時初春今月氣濟風和梅披鏡前之粉蘭

当時流行りの仮名草子まで幅広く出版されるようになり、江戸文化を花開かせる礎となった。

新元号の典拠となった「初春の令月にして、氣淑く風和ぎ」の一文は天平二年(七三〇)、万葉集の編者大伴家持の父旅人が、太宰府の邸宅で開いた梅花の宴で招客らと詠んだ歌三十二首に付けられた序文にある。そこからは、春の吉日に集い来て、麗しき梅花を詠い合う人々の高揚感が伝わってくる。

(天理図書館 吉成伸仁)